

## 高齢者の転居とエンパワーメント

水野 敏子 (東京女子医科大学看護学部)

これまで、高齢者は転居しないものと考えられてきたが、戦後都会に就職した若者が都会で一家を構える時代を迎え、地方に残された親が子どもとの同居を求め、都市に転居する例が目立つようになった。都会に若者が流出する現象は現在中国をはじめアジアに多く見られるが、30年後には日本と同じような現象が生じると考えられる。このような現象を整理し、支援の方法を検討することは上記の点からも大きな意味があると考えられる。

欧米にみられる転居の多くは高齢者向けの集合住宅や温暖な地域を求め、高齢者が自ら選択して暮らしやすい場所へ転居するのが特徴である。これに対してわが国の転居は「一人になったとき子どもの世話になるため」「子どもたちとはなれて二人で暮らすのは将来的に不安だから」などという消極的な理由で行われることが多い。

エンパワーメントとは先住民運動や女性運動から生まれた言葉であるが、看護学におけるエンパワーメントとして、Gibson (1991) は「自らの生活を自らがコントロールしていると感じられるように自らのニーズを満たす能力、問題を解決する能力、必要な資源を活用する能力を認識し、促進し、強化する社会的なプロセス」であると述べている。高齢者は「高齢者＝パワーレスな状態にある人」という弱者のイメージでとらえられることが多く、豊かな高齢者像を描きにくい。若者中心の文化の中で、高齢者の価値を見直し、力強い高齢者像をもつ社会を目指すためにも、今回はエンパワーメントの視点から転居を論じた。

エンパワーメント呼び寄せ高齢者となるためには以下の条件を有することが必要と考えられた。①比較的健康高齢者の場合には、新しい環境での生活を構築する気力と能力がある②生活の継続に高齢者が困難を自覚している③転居先の家庭との交流が転居前に活発にある④認知症がなく、移動動作に一部介助が必要であり、援助により生活範囲が広がる可能性が高いことなどである。以下詳細については資料を参照されたい。

## 高齢者の転居とエンパワーメント



東京女子医科大学  
看護学部  
水野 敏子

## エンパワーメント (エンパワメント、Empowerment)

- 20世紀を代表するブラジルの教育思想家であるパウロ・フレイレの提唱
- 中南米を始めとした世界の先住民運動や女性運動、あるいは広義の市民運動などの場面で用いられ、実践されるようになった概念である。
- 社会学的な意味で用いられる

## エンパワーメント 力を獲得していくこと

個人や集団が自らの生活への統御感を獲得し、組織的、社会的、構造に外郭的な影響を与えるようになることである

社会的に弱い人々・脆弱性を有する人々が、本来の人間としての存在を確立し、自己の持つ力を発揮できるように、社会や環境を変革していく

学問領域、対象特性によって、さまざまに定義づけられている

定義が曖昧で、多義的理論的に発展途上にある

## 看護学におけるエンパワーメント Gibson C.H.1991

自らの生活を自らがコントロールしていると感じられるように自らのニーズを満たす能力、問題を解決する能力、必要な資源を活用する能力を認識し、促進し、強化する社会的なプロセスである

多次元性：個人、二者、集団、組織、社会

## 看護者のエンパワーメント

- 看護者自身の自立性や決定権の保証
- 看護者が仕事を継続するためにはエンパワーメントが重要
- 他者をエンパワーメントならしめるには、自分自身にエンパワーメントが必要



## 患者の無力感 Powerless

- 消極的な立場に置かれた患者が、自己の状況をコントロールすることができないことで、無力感(powerless)を経験
- 無力感が健康や健康回復に望ましくない影響を与え、施設化を増長する

## 看護ケアのエンパワーメント

- 個人が自己の生活をコントロール・決定する能力を開発していくプロセス
  - ケア対象者の権利や自己決定を尊重する
  - その人自身が持てる力を発揮し、その人が目指すことを可能ならしめる
- ↓
- ケアを受けるものと提供するものがパートナーシップにより協働して問題解決

## 人口移動率 (2001年7月1日) 国民生活基礎調査

30～34歳の54.8%をピークにして年齢と共に低下するが、75歳以上では上昇

70～75歳 10.0%程度  
85歳以上 21.0%

「親や子との同居・近居」の割合は75歳以上で多くなる



## 高齢者の転居

1. 快適さを求めての転居  
職業から引退した後、夫婦共に健康、経済的余裕ある時の転居
2. 子どもや親族の近くへの転居  
配偶者の死別、健康状態の悪化  
“呼び寄せ老人”
3. 援助を求めての転居  
健康状態がさらに悪化し、福祉施設等への転居

## 転居高齢者と転居経験無し高齢者との縦断的比較研究 全国調査1987と1990年 60歳以上 都老人研

- 1年以内転居者89名、転居なし1580名
- 転居したばかりの時には経済的不満足度が高いが、追跡調査では転居なし群と差が無い
- 初回・追跡共に転居群は接触頻度が低い
- 転居群では転居なし群に比較して家族以外との接触が有意に減少し、それにより人生満足度が低下
- 精神的健康は初回・追跡調査とも差が無い
- 転居後1年未満では転居なし群に比しモラール(精神的健康)が増加
- 身体機能障害が高い場合には転居によって人生満足度が悪化

## 高齢者の転居後の適応と関連要因

工藤、三国、桑原 2006

- 1年間の転入者299名 郵送調査
- 適応群:生活に慣れた 230名(76.9%)
- 不適応群:慣れない 69名(23.1%)
- 非適応群  
年齢が高く( $P < .05$ )、要介護認定を受け、転居意志は非自発的、知らない場所への転居( $p < .01$ )  
経済的負担感、外出困難、家族への気兼ね  
健康自己評価( $p < .01$ )

## 高齢者の転居後の適応と関連要因2

工藤他

### 適応群

- 高齢者向けマンションへの転居( $p < .01$ )
- 住環境がよくなったと感じている( $p < .01$ )
- 同居家族以外からのサポートを持つ( $p < .01$ )
- 友人等との交流頻度が高い( $p < .01$ )

### 多重ロジスティック

転居先を知っていた、同居家族以外のソーシャルサポート、転居を自発的に決定、経済的負担が少ない、高齢者向けマンションへ転居した者ほど適応

### いわゆる「呼び寄せ老人」の調査から

水野敏子 東京女子医科大学

65歳以上になってから子どもと同居あるいは近居するために東京近郊に転入し、在宅療養を行っている  
転居5年以内の高齢者 98名

### 転居前の状況

- 転居前居住地: 近県移動が65.3%
- 介護者との人間関係よい(78.6%)
- 呼び寄せ前に介護者が通いや短期滞在によって介護をしていたものが1/4近い
- 少数ながら転居するまでほとんど交流の無いものもいた

### 転居理由

主な転居理由	n (%)
	n=98
入院をきっかけとして	30(30.6)
生活自立困難なため	15(15.3)
将来的に不安なため	10(10.2)
介護者の病気	10(10.2)
よく分からなかった	16(16.3)
その他	17(17.4)

### 転居前の状況と転居への家族の認識

高齢者にとって転居がよかったか悪かったか

		肯定群 n (%)	否定群 n (%)
		n=81	n=37
性別	男性	18(29.5)	3( 8.1) *
	女性	43(70.5)	34(91.9)
精神機能障害	正常～軽症	43(70.5)	26(70.3)
	中等症～重症	29(29.6)	11(29.7)
歩行状態	寝たきり	10(16.4)	5(13.5)
	つかまり歩行	39(63.9)	16(43.2) *
	杖歩行・独歩	12(19.7)	16(43.2)

\* p<.05

### 転居への意向と準備期間

		肯定群 n (%)	否定群 n (%)
		n=81	n=37
高齢者の転居希望	あり	26(42.6)	14(38.9)
	仕方ない	18(29.5)	13(36.1)
	分からなかった	17(27.9)	9(25.0)
介護者の意向	賛成	43(70.5)	21(56.8)
	仕方ない	18(29.5)	16(43.2)
転居前期間	2週間以内	17(28.3)	7(18.9)
	1-2ヶ月	6(10.0)	15(40.5) **
	3ヶ月以上	25(41.7)	9(24.3)
	分からなかった	12(20.0)	6(16.2)

\*\* p<.001

### 呼び寄せ肯定群と否定群の判別に関連する因子

変数	カテゴリー	カテゴリスコア	偏相関係数
転入期間	2週間以内	0.192	0.340
	1-2ヶ月	-0.905	
	3ヶ月以上	0.360	
高齢者性別	分からなかった	0.109	
	男性	0.802	0.301
人間関係(後)	女性	-0.219	
	よい	0.198	0.274
訪問看護	わるい	0.725	
	あり	0.433	0.220
歩行状態(前)	なし	-0.200	
	寝たきり	-0.175	0.215
	強い歩き・支持歩行	0.252	
外出介助	杖歩行・独歩	-0.402	
	あり	-0.305	0.159
	なし	0.155	
認知症状への対応	あり	-0.287	0.120
	なし	0.083	

相関比0.378 数値化Ⅱ類

### 介護者

- 自分の楽しみがある介護者88.3%
- 仕事あり 44.2%
- 自分の人生をも大切にしながら介護に当たっている様子が伺えた
- 重度の認知症の高齢者を呼び寄せたものほど介護負担感が高い
- 呼び寄せに反対であった人の負担感が高い
- 娘は呼び寄せを自己決定している者が多いが、嫁は意向が必ずしも反映されていない。

### 嫁の介護負担感の高い事例

負担感得点(12-48点) 介護継続意識(2~8点)	40点 負担感 大 3点 継続意識 小
呼び寄せ高齢者 病名 高齢者の転居希望 転居前家族構成 転入理由 NM スケール 転入時→現在 (精神状態尺度) 0-50点 N-ADL 転入時→現在 0-50点	母 81歳 認知症 嚥下ヘルニア 分らなかった 夫婦二人暮らし 介護者の夫が亡くなったため 9-10点 トイレが分らず他の場所で排泄 文句が多くいつも脅かされている 23-19点 一部介助
介護者 家族構成 介護者呼び寄せ意向 呼び寄せ決定者 家族の協力 私的相談者 公的相談者 利用サービス 介護時間	長男の嫁 48歳 子供2人の5人家族 仕方がなかった 夫 母が認知症と分かるまでは理解が無かった 分かってからは非常に協力的 夫 デイサービスの職員 デイサービス 4時間/日



呼び寄せ時は娘が自分に意地悪をされているのか、認知症のためなのか分からず  
悩み、血を投げつけ割ってストレスを発散させていた。  
最初は共に暮らすように努力したが、最近は顔を见ないようになっている。

### 呼び寄せてよかった高齢者の状況

- 転居前に生活継続困難の自覚がある
- 住む場所の利便性がよくなる
- 経済問題の解消
- 交友関係の豊かさや行動範囲の拡大
- 世話により生活が豊かになる
- 自分の時間が持てる



### 呼び寄せにより生じた問題

- 地域の利便性の低下
- 人との交流の減少
- 母親役割重複による葛藤
- 生活時間・習慣の違い
- 高齢者専用部屋の確保
- 認知症になってからの転居のため  
互いの理解困難



### よりよい呼び寄せのために

- エンパワーメント呼び寄せ高齢者の状況
- ① 比較的健康高齢者の場合には、新しい環境での生活を構築する気力と能力がある
  - ② 生活の継続に高齢者が困難を自覚
  - ③ 転居先の家庭との交流が活発
  - ④ 認知症がなく、移動動作に一部介助が必要、援助により生活範囲が広がる



### よりよい呼び寄せのために

- 準備期間が3ヶ月以上あること
- 転居を予定している家庭に高齢者が何度か滞在してみて、転居が可能か検討する
- 住宅や住宅周辺の整備状況、空気や水の質及び騒音、生活利便性などの環境要因が快適か確認  
交通、商店街、医療機関、公的資源
- 高齢者の部屋の部屋が確保できるか
- 転居後の生活について両者の認識の一致
- できればケアマネージャーなどの専門職を交えて転居前に話し合う。

## エンパワーメントの取組

- 同郷出身者との交流
- 老人クラブによる「転居者をあたたかく迎える運動」
- 民生委員による転居高齢者への訪問「ようこそ訪問」  
社会資源情報提供、ふれ合いサロンなどへの誘い
- 転居者の社会的孤立防止プログラム

Wiseman 転居後6ヶ月が適応の臨界期  
支援が必要な時期



## 転居エンパワーメント

- 自己決定  
転居に後悔の念が生じた場合でも、自分で選択したということが自分自身を納得させる際に必要な要素となる可能性がある。  
心の整理に影響する
- 予測性  
新しい環境の予測、転居前・後の環境上の管理可能性が転居の影響を緩和する要因である
- コントロール感  
小さなことでも一つコントロール感のあるものを持つ
- 第三者への相談

ご静聴ありがとうございました。

